



# 私の放送人生

元毎日放送(MBS)  
町田 正夫氏

## 「ネットワークは

## つらいよ、在阪局の

## ネット騒動記」

### 1. 開局延期騒動

毎日放送(MBS)は昭和33年12月にテレビ開局すべく準備を進めていましたが、直前になって頓挫してしまいます。当てにしてきたTBS(当時KRテレビ)から全面的に番組送出を拒否されたためです。

私は東京支社にいましたが呆然自失。力が抜けてしまいました。この先どうなるか全くわかりません。

突然仕事がなくなりブラブラしている、見苦しいのか「出社しなくていい」といわれ、仕方なく映画を観たり自動車教習所に通ったり…。

私はその2年前の昭和31年、関西唯一のテレビ局大阪テレビ(OTTV)に新卒採用されました。東京支社編成部に配属され、開局準備に当たりました。NTVとTBSとのクロスネットで、これが民放テレビネットワークの始まりです。ネットルールの作成やマイク口回線運用に関わりました。先輩局から学ぶことは多く、麹町と赤坂をせつせと通う2年間でした。

やがて多局化時代を迎え、東阪4局づつとなります。OTTVは朝

日と毎日とで作った局なので分かることになりました。好きな方を選びたいいわれ、私はMBSを選びました。

関西4局はすぐに開局態勢に入りましたが、東京は競願社が多く調整が難航します。一刻も早く開局したい関西局は、東阪2対4の状況下で開局を決断しました。

読売テレビはNTVと組む。関西テレビは独自路線をいく。残るTBSをABCとMBSが奪い合うという形になりました。両局ともTBSに提供しているスポンサーの同意を得るべく動きます。

多くのスポンサーがMBSを選んでくれると喜んでいた所、突如TBSが発表します。「スポンサーの意向による『スポンサードネット』ではなく、局と局の結びつきの『ステーションネット』でいく。TBSはABCと組む」というのです。

民放ラジオと同じだと勝手に思い込んだのがいけなかった。でも、こんな基本的なことを何故もつと早く言ってくれなかったのか。それならそれで打つ手もあったのに。何せ開局の10日前です。如何ともし難く開局を断念せざるをえませ

んでした。民放史上、直前の開局中止の例は他にありません。無残な姿でした。

### 2. ようやく開局

年を越して昭和34年。東京の新局の調整がつき、2月に日本教育テレビ(NET)、3月にフジテレビが開局することになりました。これでようやく東阪4対4になったのです。気ままにしていた私は「出社せよ」といわれ運転免許は残念ながら諦めました。

MBSはフジと同日の3月1日に開局しました。悪夢の開局延期から3か月。フジをメインとしたフリーネットが始まりました。開局出来る喜びを胸に河田町通いに励みました。

編成を中心に全セクションが一堂に会するフジの新社屋は美しく、理想のパートナーだと思いました。「克蘭チ船長」を始め沢山のレギュラーや単発をネットしました。MBS発の「鉄腕アトム」(実写版)も懐かしい思い出です。

ところが鹿内体制が整ったフジは徐々に関西テレビとのステーションネットに移行していきます。MBSは又々東京局から袖にされ

たのです。呆然自失。親しくなった編成部や映画部やネットワーク部の方々の別れは実に淋しかったです。

### 3. NETとのネット

最後に残った同士のNETとMBS。わずか2局ネットで、しかもNETは「純教育局」、MBSは「準教育局」というハンデを背負っている弱小ネットでした。

OTVからABCを選んだ嘗ての同僚はTBSと組んで「五社連盟」「JNNネット」と隆々たる勢いで差は開くばかり。あの時ABCを選んでいたら楽な道だったのにとチラツと思うこともありましたが、でもNETは徐々に力量を發揮していきます。『ラミー牧場』『ローハイド』『日曜洋画劇場』『判決』等、太い柱が次々に建っていきます。材木町通いも楽しくなってきました。

ところがMBSの新聞出身の上層部はNETとまともな会話をせず事々に諍っていました。例えばNETが「ANN」といえばMBSは「朝日のAだ」といつて反対する。「オールニッポンのAだ」とNETは怒る。MBSが「プラ

イムタイムの半分を担当させる」といえばNETは「そんな力はない」といつてMBS発卒の平均視聴率の低さを指摘する。私は東京編成でただオロオロするばかり。

### 4. 東京12CHへの接近

昭和37年、米軍から返還される12CHが民間に割り当てられることになりました。MBSは「中央教育放送」の名称で申請します。私は申請書の作成を命じられました。これが実現すれば大阪のMBSと完全ネットが出来る。もう東京局から袖にされることはなくなるのだと、思いながら書きました。まあまああの申請書が書けたと自己満足した記憶が残っています。しかし科学技術振興財団に呆気なく決まっています。

中央教育放送は郵政省を相手として東京高裁に行政訴訟をおこしました。「如何なる根拠に基づいて財団に免許を与えたのか?」「申請書類だけでどうやって優劣をつけるのか?」など、電波行政が曖昧で恣意的なことを指摘したのです。

東京高裁から最高裁まであがり昭和43年に郵政省の敗訴が下さ

れました。中央教育放送の全面勝利です。又々驚きました。かくも簡単に中央官庁の判断がひっくり返されるとは郵政官僚の戸惑いはいかばかりか。

最高裁の判決を受けて電波監理審議会会で再審議が行われ私は何回も傍聴しにいきました。実に面白い経験でした。

その後、紆余曲折があり、最終的に、東京12CHへの資本参加とプライムのネットという形に落ち着きます。

東京12CHとプライム3時間のネットを組むとNETに伝えるにいく足取りは重かった。苦労を共にしてきた現場同士です。NETにとって大阪抜きは3時間となるのです。複雑な気持ちでした。

### 5. 大阪ネットチェンジ

昭和50年、ネットチェンジが発表されました。いやー驚きました。だって「あのTBS」と組むというのですから。開局不能に陥ったあの日から16年。まだ挫折感はいまもありませんでした。

そもそも新聞社の思惑で行われることが面白くない。「腸捻転ネット」だと新聞人は言うが、我等

テレビ人間にとっては関係ないことだ。

読売新聞は正力松太郎を中心にテレビ時代を見透して見事に早くから着々と構想を練ってきた。鹿内信隆もやや遅れはしたが電波の威力に気がついてフジサンケイグループを築き上げた。

だが朝日新聞と毎日新聞は新聞の優位性を誇り過信し過ぎて、長い間テレビを馬鹿にしてロクな電波行政をして来なかった。

ああそれなのに。新聞の総広告費がテレビのそれに追い抜かれたのが昭和50年。ネットチェンジの年です。尻に火がついてようやくテレビの力に気づいたのだ。遅すぎる!

東京支社編成部長としてTBSとの交渉に当たりましたが毎毎に対立しました。つけられたアダ名が「町田閣下」。カツカシイだからです。過去をひききずっている最も不適格な男でした。すぐに配転になるだろうと覚悟していたのに何故か一向に変わらぬ。TBSの編成部長が4人5人と変わっても私はそのままです。勘ぐりました。あの屈辱は私なんかより上層部の方がはるかに大きかったであ

ろう。だから「喧嘩町田」を面白  
がっているのではないか…。

TBSから強く要求された業務  
協定の締結には反対し続けました。  
条文が余りにも隷属的だったから  
です。遂に調印には至りませんで  
した。

ある日、TBSの上層部の方か  
ら呼び出されて叱責されました。  
「心痛事の8割はMBS案件であ  
る。系列間競争をしているのに大  
変困ったことだ。そして問題は君  
だ」

### 6. 制作部へ

ようやく制作部へ移る日が来ま  
した。そもそも番組を作りたくて  
放送局に入ったのに、ネットの狭  
間で右往左往して数十年。既に晩  
年です。残り時間は少ない。

編成部在籍中も番組制作にはか  
かわっていました。ネットチェン  
ジの時点でみれば『まんが日本昔  
ばなし』『仮面ライダー』『野生  
の王国』などをプロデュースして  
いました。でも外注という形では  
なく、自らの手で作ってみたい。  
手がけたのは『中村敦夫の地球  
発22時』です。

『激』を合言葉に地球を駆け回

る企画で、『NHK特集』が正規  
軍ならこちらはゲリラ。「ベルリ  
ンの壁」「シチリアのマフィア」  
「北朝鮮探訪」から「あいらん地



中村敦夫さん(右)

区」まで、硬派路線を走りました。

やがて(土)23時に移ることに  
なりましたが、深い時間の方がよ  
り手応えがありました。一定の評  
価をもらい制作する喜びに浸って  
いたら、今度は19時台に移れとい  
うのです。これには戸惑いました。  
お子様ランチを作れというのか。

そこで起こったのが「電波芸者  
事件」でした。記者会見の席で中  
村敦夫が吠えたのです。「自分は  
電波芸者だからどこでも踊るが、  
視聴者はどうなんだ。TBSのト  
ップがアホか中間がアホか」。翌

朝の新聞に中村敦夫と私のツーシ  
ョットの写真がのる。

本社で査問会議が開かれ町田の  
出来レースではないかと強く叱責  
されました。『タレント行政不  
行き届き』という裁定が下り、直ち  
にプロデューサーの任を解かれて  
傍系会社へ転出。制作の夢は呆気  
なく消えてしまいました。



### 7. (株)インターボイスに入社

ボーっと生きて3年。ある日イ  
ンターボイスから制作責任者にな  
らないかとの誘いがありました。

「地球発」を下支えしてくれた会  
社で、遊んでいる私に声をかけて  
くれたのです。再び制作現場に立  
てると思ひ受けることにしました。  
町場のプロダクションはどの局  
にも出入り出来ず。NTV『所

さんの目がテン』TX』とことん  
ハテナ』等、民放番組に関わりま  
したが、中でもNHKとの接触は  
民放とは違った感覚で新鮮でした。  
「NHK特集」を始め沢山の番組  
を作らせてもらいました。こんな  
楽しいことが待っていたとは。



ギャラクシー賞授賞式

世は多チャンネル時代。クラッ  
シック好きの私は専門チャンネル  
を思い立ちました。欧州の「クラ  
シカ」と交渉し珠玉の音源を入手  
する目途がつき「クラシカジャパ  
ン」を設立します。

インターボイス一社では荷が重  
いので、旧知の東北新社の植村伴  
次郎氏に共同経営を打診すると二  
つ返事でOKしてくれました。霞  
ヶ関で代表して免許を受領した時  
は感無量でした。

佐渡裕指揮ベートーベン『第九』



クラシカジャパンの発足式

をオープニングに、クラシカの名演奏を佐渡裕の案内で送る日が始まりました。夢の日々が過ぎました。しかしCS放送は甘いものではありませんでした。収支を合わせることの難しさを知りました。すべてを植村氏に託して私は去ることにしました。その植村氏も残念ながら既に鬼籍に入ってしまった。チャンネルの後が心配です。

## 8. 回想

想えば、OTVから分かれる時、ひよんな拍子でMBSを選んだばかりに波風高いネットワークの渦

に巻き込まれ徘徊の道へ。

ようやく手にした制作の道は事件を起こして追放の身に。

拾われたプロダクションで80才過ぎてでも制作三昧。

「人間万事塞翁が馬」でした。

私は民放5局のすべてと東京でネット交渉に当たりました。色々な局面での出会いがありました。今、民放クラブで再会しますと、往時のことが色濃く思い出されます。私は昭和7年生まれで90才の一手手前です。喜怒哀楽の彼方、すべては懐かしい。

## 町田正夫氏の放送人生

東京大学文学部

美学美術史学科卒

1956年大阪テレビ 入社

1958年毎日放送へ移籍

東京支社テレビ編成

部・テレビ制作部他

1988年日中ビデオ出向

1991年毎日放送依願退職

1992年インターボイス入社

インターボイス制作

社長

ATP理事

2014年インターボイス退社